

包装人クローズアップ

◆ 磯田拓也氏 (シバセ工業 代表取締役社長)

「プラスチックストローはなくなるしない」

国産ストロー発祥の地から“正視眼”の情報を発信

“脱プラ”の象徴としてストローが取り上げられるようになり、約1年が経過した。大手外食チェーンや商業施設、ホテルなどは相次ぎ、プラスチックストローの提供中止や紙ストローなど代替製品への切り替えを発表している。しかし、ポリプロピレン製ストロー国内トップメーカーであるシバセ工業(岡山県浅口市)の磯田拓也代表取締役社長は「日本でプラスチックストローがなくなることはないだろう」と断言する。ストローを通して見える、プラ製品の展望を聞いた。(取材・文/植田千絵)



磯田拓也代表取締役社長

バッシングは“再評価”へのきっかけに

“国産ストロー発祥の地”とされる岡山県浅口市で創業したシバセ工業は、1969年から飲料用ストロー生産を核とする事業展開を進めてきた。自社ブランドで販売する規格品ストローは、色柄や口径、仕様の異なる約200種類の多彩なバリエーションを持つ。全て1ケースからの小ロットで販売しており、とりわけ中小規模の飲食店から支持は厚い。

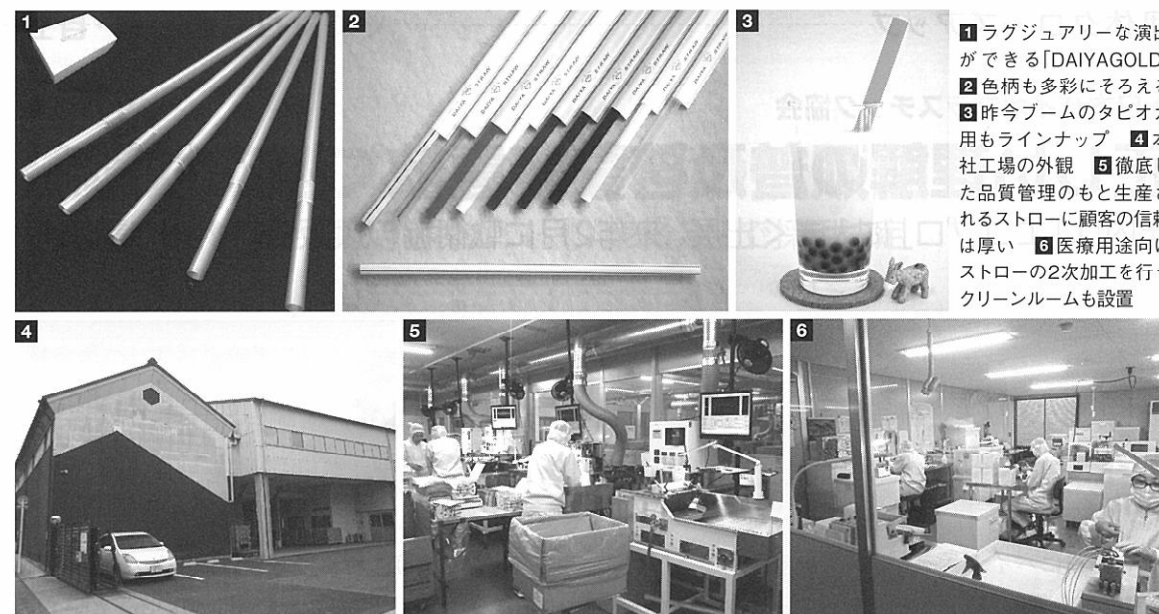


飲むのに便利な「フレックスストロー」

安価な海外製品への競争力となるのが、あらゆる飲料に適した高品質なストローを少量多品種生産できる点だ。口径は1~13mmで0.1mm単位から、また、厚みは0.1~0.5mmの間で製造可能。自社開発の検査装置や、常時自動計測・制御を行う生産監視システムを導入するなど、徹底した品質管理により、効率的かつ安定的な生産体制を実現している。

昨今の脱プラ問題について問えば「事業への直接的な影響は出ていない」と磯田社長。現に同社の業績は右肩上がりに推移しており、今春以降は口径の太い「タピオカ用ストロー」が好調で、新規の取り引きも増加しているという。「昨夏から年末に掛けては、紙製ストローなどを求める問い合わせが殺到したものの、今年に入ってピタリと取まった。さまざまなメディアに取り上げられたことが、結果的にプラスチックストローの利便性や安全性を再認識いただくきっかけにもなったようだ」と、意外とも言える実感の口にする。

また、同社がかねてから“使い捨てでき、衛生的な薄肉パイプ・チューブ”として提案する「工業用ストロー」も、医療・工業分野で引き合いを増



1 ラグジュアリーな演出ができる「DAIYAGOLD」
2 色柄も多彩にそろえる
3 昨今ブームのタピオカ用もラインナップ
4 本社工場の外観
5 徹底した品質管理のもと生産されるストローに顧客の信頼は厚い
6 医療用途向けストローの2次加工を行うクリーンルームも設置

やしている。ストローの長さや直径、先端形状などの加工方法を顧客のニーズに応じて設計・製造するもので、具体的には、アルコール検知器向けマウスピースや医療器具用カバー、ばねなど機械部品の輸送包装など多方面で採用されている。磯田社長は「プラ製品ならではの長所、つまりコストや衛生性、使い勝手の良さが正当に評価された結果、飲料用ストローも工業用ストローも、ともに需要が伸びているものと認識している」と語る。

最優先すべきは消費者の利便性

以前から磯田社長は、脱プラを進める論調に否定的な意見を示し、メディア出演などを通してプラ製品の優位性を発信してきた。「環境イメージ向上を狙って『脱・プラスチックストロー』を掲げる大手企業は増えているが、そもそもストローは消費者へのサービスで提供されるもの。本来、最重視すべき消費者の利便性を無視した施策ではないか」と疑問を投げかける。

もちろん、同社においても生分解性樹脂など、新たな原料を使ったストローの検証には取り組ん

でいるが、生産コストや在庫管理、品質安定性など、課題は少なくないという。また、現状ではほかの廃棄物同様に焼却処分されるため、製品化のメリットは見出しにくいとの見解だ。「道端や海にプラスチックストローが流出した場合を前提に議論が進んでいることに、大きな違和感がある。プラごみへの意識が高まっている今だからこそ、廃棄物の回収・処理のインフラや仕組み作りを目を向けるべき。メーカーとして、要望をしっかりと発信していかなければならないと感じている」と、磯田社長は自身の考えを述べる。

今年7月、タピオカドリンクの本場・台湾ではプラスチックストローの規制が始まったが、日本国内でのストローの切り替え・廃止の動きはごく一部に留まる。「プラスチックストローが本当に悪者なら、すでになくなっていてもおかしくないはずだ」と話す磯田社長のもとには、報道を見た消費者から応援の手紙も寄せられているという。脱プラ問題への結論を出すには、時期尚早と言えそうだ。